ミュージカルの照明

Musical Lighting

1935年生。1957年日本大学芸術学部演劇学科卒業。劇団四季技術監督、舞台照明家。

沢田 祐二
Yuji Sawada

◀キーワード：ミュージカル、ミュージカルの照明設備、新しい照明機器の登場

1. ミュージカルは変貌した

ミュージカルはこの15年の間で大きく変貌した。1981年、ロンドンで幕を開けた“キャッツ”以後のミュージカルの舞台はしだいに大掛りになった。大金をかけて華麗で豪華な舞台装置、衣裳、アッと驚く仕掛けなど、劇場的な楽しさを満載した舞台が多くなった。幅広い観客層を魅了し感動させ、多くの観客に受け入れられること、そのためにプロデューサは、観客の視線に触れる主題を持った物語を捜し、それをクリエイティブ・スタッフたちに舞台化させ、採算点とのバランスの中で興行として成功させる。このプロデューサの考え方と実行力が、ミュージカルを大きく変えたと言える。“キャッツ”以後の作品として「スターライト・エクプレス」(1984年)、「レ・ミゼラブル」(1985年)、「オペラ座の怪人」(1986年)、「ミスサイゴン」(1990年)、「サンセット大通り」(1993年)、「美女と野獣」(1994年)などがニューヨーク、ロンドンで現在もロングラン公演が続けられ、世界の主な都市でも多くの観客を集めている。こうした大作、豪華路線は同時に1980年ころから発達してきたコンピュータ、デジタル技術の進歩、制御システムの開発などを舞台人が積極的に取り入れてきたことによって、舞台技術に飛躍的な進歩をもたらし、演出表現上に大きな可能性を見出すことができ、「変貌」するミュージカルを裏から支えたと言える。

2. ミュージカルの照明設備

ミュージカルの照明舞台設備は何もない。ブロードウェイの仕込み前の劇場は、舞台床は黒く塗られたコンパネが敷き詰められ、1枚はがせば奈落が見える。スノコを見れば、空バトンが数十本並び、照明用ブリッジ、ダクトもない、ドン帳、袖幕もない、黒く塗られたむき出しの荒壁、そして手引きの綱元、裸電球が点灯しているだけ、いわゆるブラック・ボックスである。そこにプロダクションが演出プランにもとづいてすべての“物”を持ち込み自由に仕込む。セリ舞台が必要であれば、望ましいサイズ、演出上必要なスピード可変可能なマシーンを持ち込み、もし奈落が浅ければ奈落を掘る。装置プランに沿って、空バトンは大道具、照明などに振り分けられ、もっとも理想とする場所につり込む。袖幕、一文

字幕の位置、色、材質、そしてドン帳も作品にふさわしい物を仕込む。客席の壁の色も、いすの配列も、照明器具のポジションも必要であれば壁にアンカを打ちパイプを設け天井から照明用ダクトのつり下げなど、上演する作品に最もふさわしい劇的空間に作り変えてゆく。照明設備は電源があるだけで、調光機、調光卓、そして、あらゆる照明機器が、レンタル会社から最新鋭の機器が持ち込まれる。その中にはメーカーによる試作品もあれば、ヴァージョン・アップされた製品も入っている。こうして音響、舞台機構を含め、日進月歩で次々と開発される機器を常に取り込んで舞台を作ってゆく。演出上必要な効果のためにメーカーが新たに開発する。舞台作りのソフトの中からハードが生まれる理想的な型がここにある。

劇団四季が現在日本各地に建設したミュージカル専用劇場ではこのブラック・ボックスのシステムを採用している。作品とともに舞台装置、衣裳、小道具が移動し、同時に舞台機構、照明機器、音響機器も移動する。公演地が変わり、新たな仕込みの時には最新鋭機器と交換する。

3. 新しい照明機器の登場

現在ニューヨーク、ロンドンでロングランが続いている作品を開幕した順に照明の特徴を見ていくと、その時々開発された機器がいから取り入れられたがよくわかる。

- ・「オペラ座の怪人」IC(電子回路)を使ったロウソクの明滅。落下するシャンデリアに対するワイヤレス調光。
- ・「スターライト・エクプレス」グラスファイバによる満天の星。カラー・スクローラの多用。
- ・「レ・ミゼラブル」スウィングするライトカーテン。シールド・ビーム型スポットの多用とスモーク。
- ・「サンセット大通り」MR球を使った“ヴァーディ”と呼ばれる小型器材で舞台装置の柱、彫像のライト・アップ。HMIによるPANIスライドシステム。
- ・「美女と野獣」ムービング・ライトの多用(96年ころからミュージカルでの主流になってきている)。

ミュージカルの照明(舞台照明)は、自由な発想と新しい技術を取り入れながら、興行上のコストバランスと感動の舞台の中に上手に埋没している。